

奇跡の一滴

豊秋小学校

五年二組

須藤

晴花

「トポトポッ

」。

コッ

プに注が

れると

う明な

水。お風呂上がり、私はいつものようにリビ

ングにあるウォーターサーバーのレバーをお

します。冷たくて、おいしいこの水が、私に

とっての「当たり前」の毎日です。正直に言

うと、私はこれまで「水道の水」をそのまま

飲むことに少していこうがありました。家に

は浄水器があり、飲むのはいつもサーバーの

水。じゃ口から出る水は、手を洗ったり皿

を洗ったりするためのもので、飲み水とは別

物だと思っていました。しかし、今回の作文

をきかけにくわしく調べてみると、自分が

どれほど恵まれていたのかを知ることになり

ました。

まずおどろいたのは、日本の水道水の安全

さです。世界には約百九十もの国があります

が、じゃ口から出た水をそのまま飲める国は

日本をふくめてわずか十五カ国ほどしかない

そうですね。つまり、世界のほとんどの国では水道の水は飲む前に一度わかしたり、お店でペットボトルの水を買ったりするのが当たり前に消毒をしていいるからです。水は五十項目以上ものきびしい検査を受け、二十四時間休まずに大切に守られています。私が「も」と美味しく飲むために浄水器やサーバーを使っているそのうら側で、実はもとの水道水が世界でもきれいで美味しい安全な水であるということに私はおどろきました。

一方で、世界に目を向けると、信じられないような苦しい現実があります。今、世界では約二十億人、つまり四人に一人が、安全な飲み水を手に入れられない場所であらして、いるそうです。ユニセフなどの資料によると、よごれた水や不衛生な環境が原因で命を落とす子どもは、毎日八百人以上もいると知りました。どろのまじった水やばいきんのいる池

や川の水を、生きるために仕方なく飲まなければならぬ人々がいるのです。

もし、私がその立場だったらと想像してみました。朝起きてから数時間かけて、重いバケツを持って遠くの川まで水をくみに行く毎日。その水はにごっていて、飲むと病気になるかもしれない。でも、ほかに飲むものがないのです。学校に行く時間もなくて、一日中水のことだけを考えて生きる生活。とても辛くて生きるのすらしんどいと思いました。私たちが使っている「安全な水」は、決して魔法のようにわいてくるものではありません。日本は水が豊かな国だと言われますが、地球全体で見れば、人間が飲み水として使える水は、地球上の水のわずか0.01%にも満たないそうです。まさに「奇跡の一滴」だと感じました。

今回の作文を通して、私の水に対する考え方は大きく変わりました。当たり前だったことが、とても恵まれた奇跡だと思いました。こ

れまでは、水を無だ使いしてしまいうことがありました。しかし、その無だにしている一滴は、世界のどこかの子どもたちが、生きるためにどうしてもほしがっている水なのだと感じました。

これからの私にできることはまずこの「恵まれた奇跡」をわすれずに感^ヤじたいです。そして、いつか世界中のすべての子どもたちが、私と同じように、安心してきれいな水が飲める日が来ることを願ひ、毎日水を無だにしないように大切に使うていきたいです。